



攻勢性を強める中国の軍事戦略と活発化する軍用機訓練飛行の関係

NIDS コメンタリー

地域研究部長 門間 理良
 第 172 号 2021 年 6 月 15 日

はじめに

中国海空軍の近代化が進むにつれて、それらの訓練海空域が以前よりも拡大している。日本周辺を見ても、最近では与那国島と台湾本島との間の海域をジャンカイ 2 級フリゲート 1 隻が通過している¹。この海域で中国軍艦艇が航行したのを防衛省が発表したのは初めてで²、中国海軍が第 1 列島線を突破して西太平洋に出られる様々なルートにチャレンジしていることがわかる。この動きと同じ文脈で、蔡英文政権が成立した翌年の 2017 年頃から台湾本島周辺海空域における中国軍艦艇及び軍用機の訓練活動が活発化していることは、台湾の公表資料によって知られるようになってきている³。前稿で記したように、台湾が設定している防空識別圏（以下、TADIZ と略記）への中国軍用機の進入を 2020 年 9 月から台湾国防部がウェブサイト上で公表するようになったことにより、多数機による TADIZ 進入のケースでは日本のメディアでも報じられるようになった⁴。

前稿（NIDS コメンタリー第 168 号）では台湾国防部の公表資料に基づきながら、中国軍用機の TADIZ への進入の実態を明らかにするとともに、中国航空戦力の充実ぶりを分析した。それに続く本稿は、中国が軍用機の訓練飛行を積極的に行うようになった背景を軍事戦略の変化から論じるとともに、中国軍用機が TADIZ 進入を繰り返す訓練飛行を実施している理由を分析する。これらの分析により、中国軍用機の飛行訓練が複雑化し、より実戦に対応すべく高度化していること、TADIZ 南西空域が中国にとってより重要になってきていることを明らかにしている。

1 中国軍用機の台湾防空識別圏進入活発化の背景

(1) 攻勢性を強化している中国の軍事戦略との関係

中国は毛沢東が軍事指揮権を確立して以降、「積極防御」戦略を採用し、現在の習近平政権もその戦略を維持している。文言自体に変化はないものの、時代が下るにつれて、サイバー攻撃や弾道ミサイルによる飽和攻撃に代表されるがごとく、先制攻撃を仕掛ける側が圧倒的に有利な状況が生まれている。鄧小平時代になると、第三次世界大戦勃発の可能性が低くなり、局地戦争を主要な戦争と位置づけるようになった。中国は

¹ 統合幕僚監部プレスリリース「中国海軍艦艇の動向」2021 年 5 月 1 日。

https://www.mod.go.jp/js/Press/press2021/press_pdf/p20210501_02.pdf

² 「中国軍艦、与那国島と台湾の間を航行…防衛省が初公表」『讀賣新聞オンライン』2021 年 5 月 1 日。

<https://www.yomiuri.co.jp/national/20210501-OYT1T50227/>

³ 中華民国 106 年国防報告書編纂委員会『中華民国 106 年国防報告書』国防部、2017 年、38 頁。

⁴ 台湾国防部発表資料の形式は統合幕僚監部のプレスリリースを踏襲している。以下で比較されたい。

防衛省統合幕僚監部：https://www.mod.go.jp/js/Press/press2021/press_pdf/p20210430_05.pdf

台湾国防部即時軍事動態（公表元は台湾空軍司令部）：

[https://www.mnd.gov.tw/NewUpload/202105/0520%E6%88%91%E8%A5%BF%E5%8D%97%E7%A9%BA%E5%9F%9F%E7%A9%BA%E6%83%85%E5%8B%95%E6%85%8B\(%E4%B8%AD%E8%8B%B1%E6%96%87%E7%89%88\)_080253.pdf](https://www.mnd.gov.tw/NewUpload/202105/0520%E6%88%91%E8%A5%BF%E5%8D%97%E7%A9%BA%E5%9F%9F%E7%A9%BA%E6%83%85%E5%8B%95%E6%85%8B(%E4%B8%AD%E8%8B%B1%E6%96%87%E7%89%88)_080253.pdf)

従来から局地戦争における攻勢性を重視していたため、攻勢性の重要度が増してきている⁵。そうした中で、攻勢性を体現する航空戦力の活動が積極的になっていると考えられる。

また、各軍種の戦略も空間的に活動の幅を着実に広げている。空軍の戦略は「国土防空」から「攻防兼備」へ、さらには「空天一体、攻防兼備」（天は宇宙を指す）になった⁶。この空軍戦略の能力建設における含意は、偵察・早期警戒、空中進攻、防空・ミサイル防衛、戦略的戦力投射の重視である⁷。部隊の展開空域は太平洋上に既に拡大している。海軍戦略も「沿岸防御」から「近海防御」へ、そして現在は「近海防御、遠海防衛」に転換し、活動範囲を外洋に広げている⁸。この流れの中で、中国本土沿岸から遠く離れた海域で活動する海軍艦艇を援護する軍用機の重要性も増している。

（2）自信を増大させている中国軍

前述の軍事戦略を実現させるため、中国は軍事予算の拡大を続け、武器・装備の近代化や組織の改編に邁進し、戦って勝てる軍隊への変貌を急いでいる。とりわけダウンサイジングの対象となっている陸軍と比較して、海軍と空軍の近代化は著しい。さらに、地形の影響を受けず、遮蔽物もない海上や空中は、武器・装備の優劣の差が陸上よりも反映されやすいことも近代化を急ぐ背景と考えられる。軍艦では艦砲での打ち合いになる距離に達する前に、索敵を行い相手の射程圏外から防空能力を超える数の対艦ミサイルを発射した方が勝利する。また、静粛性に優れた潜水艦による魚雷での待ち伏せ攻撃も大きな脅威となっている。戦闘機による戦いも、ステルス性能があり、優れたレーダーと長射程の空対空ミサイルがある方が圧倒的に有利である。ドッグファイトはよほどのことがない限り起こりえない状況にあると言える。国防予算も公表値で台湾の十数倍に及ぶ現在の中国軍は、このような武器を多数そろえているとの自信を備えている⁹。

（3）訓練を重視する中国軍

習近平政権が成立してから、中国軍は統合作戦を遂行し勝利できる軍隊にするために訓練を重視するようになってきている。中国が 2013 年に「東シナ海防空識別区」を設定して以降、中国空軍による第一列島線を越えた飛行や台湾周辺空域での飛行が頻繁に行われるようになり、訓練の回数や機種・機数も増加している¹⁰。その背景には実戦経験の不足を中国が自覚していることが挙げられる。中国軍は建国直後の朝鮮戦争を

⁵ 門間理良「第 1 章 情報化戦争の準備を進める中国」防衛研究所編『中国安全保障レポート 2021—新時代における中国の軍事戦略—』防衛研究所、2020 年、6-12 頁。

http://www.nids.mod.go.jp/publication/chinareport/pdf/china_report_JP_web_2021_A01.pdf

⁶ 中華人民共和国国務院新聞弁公室『新時代的中国国防』人民出版社、2019 年、29-30 頁。

⁷ 山口信治「第 2 章 空軍の戦略的概念の転換と能力の増大」防衛省防衛研究所編『中国安全保障レポート 2016—拡大する人民解放軍の活動範囲とその戦略—』防衛省防衛研究所、2016 年、21 頁。

http://www.nids.mod.go.jp/publication/chinareport/pdf/china_report_JP_web_2016_A01.pdf

⁸ 注 6 に同じ。

⁹ 中国軍の抱く自信に関しては、トシ・ヨシハラ著、武居智久監訳『中国海軍 vs. 自衛隊』（ビジネス社、2020 年）が参考になる。同書は、近年艦艇の更新を進める中国海軍が、以前は格上と見なしていた海上自衛隊よりも優れた戦力を擁しており、開戦しても勝利するとの自信を深めている状況について、中国側の論文を分析しながら明らかにしている。イージス艦や先進的な通常動力型潜水艦を保有し、練度も高い海上自衛隊に対してすらそうである以上、台湾軍に対する中国軍の自信は揺るぎないものになっていると考えられる。他方、現代の戦闘が統合作戦であることを考えると、本書で展開される単純な海軍戦力の比較は説得力に欠ける面があることは否めない。

¹⁰ 謝游麟「析論『軍改』後中国大陆空軍之發展」『空軍學術双月刊』第 671 期、2019 年 8 月、94 頁。

<https://www.mnd.gov.tw/NewUpload/201907/06->

[%E6%9E%90%E8%AB%96%E3%80%8C%E8%BB%8D%E6%94%B9%E3%80%8D%E5%BE%8C%E4%B8%AD%E5%9C%8B%E5%A4%A7%E9%99%B8%E7%A9%BA%E8%BB%8D%E4%B9%8B%E7%99%BC%E5%B1%95_294786.pdf](https://www.mnd.gov.tw/NewUpload/201907/06-%E6%9E%90%E8%AB%96%E3%80%8C%E8%BB%8D%E6%94%B9%E3%80%8D%E5%BE%8C%E4%B8%AD%E5%9C%8B%E5%A4%A7%E9%99%B8%E7%A9%BA%E8%BB%8D%E4%B9%8B%E7%99%BC%E5%B1%95_294786.pdf)

除くと大規模な戦争を行っていない。せいぜい中印国境紛争、中ソ国境紛争、中越戦争程度である。実戦を経験していないことは中国軍にとって不安要素であり、それをカバーするために習近平政権は軍事訓練を極めて重視している。TADIZ における軍用機の飛行もその一環と考えられる。

(4) 台湾と米国の接近に対する苛立ちと警戒感

中国軍用機の動向を見ると、例えば、双十節（10月10日：中華民国建国記念日）や光復節（10月25日：日本軍の受降式典実施記念日）など台湾の記念日に飛行する嫌がらせはしていないが、米国側に顕著な動きがあった日の前後に、中国が爆撃機や戦闘爆撃機を伴った大規模編隊での訓練飛行を実施する傾向があることがわかる。例えば、2020年9月18日、19日の大規模訓練飛行は李登輝元総統の葬儀出席のために米国政府がクラック国務次官を台湾に派遣した時と重なっている。また、2021年1月23日のH-6K爆撃機8機を飛ばした訓練飛行は、1月20日のバイデン米大統領の就任式典があり、それに米台断交後初めて駐米台湾代表が参加したことや、23日に米空母がバリンタン海峡（バタン諸島とルソン島間の海峡。バシー海峡の南に位置）から南シナ海に進入したことと関係があると考えられる。3月26日は20機の中国軍用機がTADIZに進入した。この前日には米台のコーストガード間の協力が発表されている¹¹。4月12日には1日あたりとしては過去最多の25機の中国軍機がTADIZ南西空域に進入した。この日は前日にブリンケン米国務長官が中国の台湾に対する「攻撃性を増している行動」に懸念を表明していた¹²。

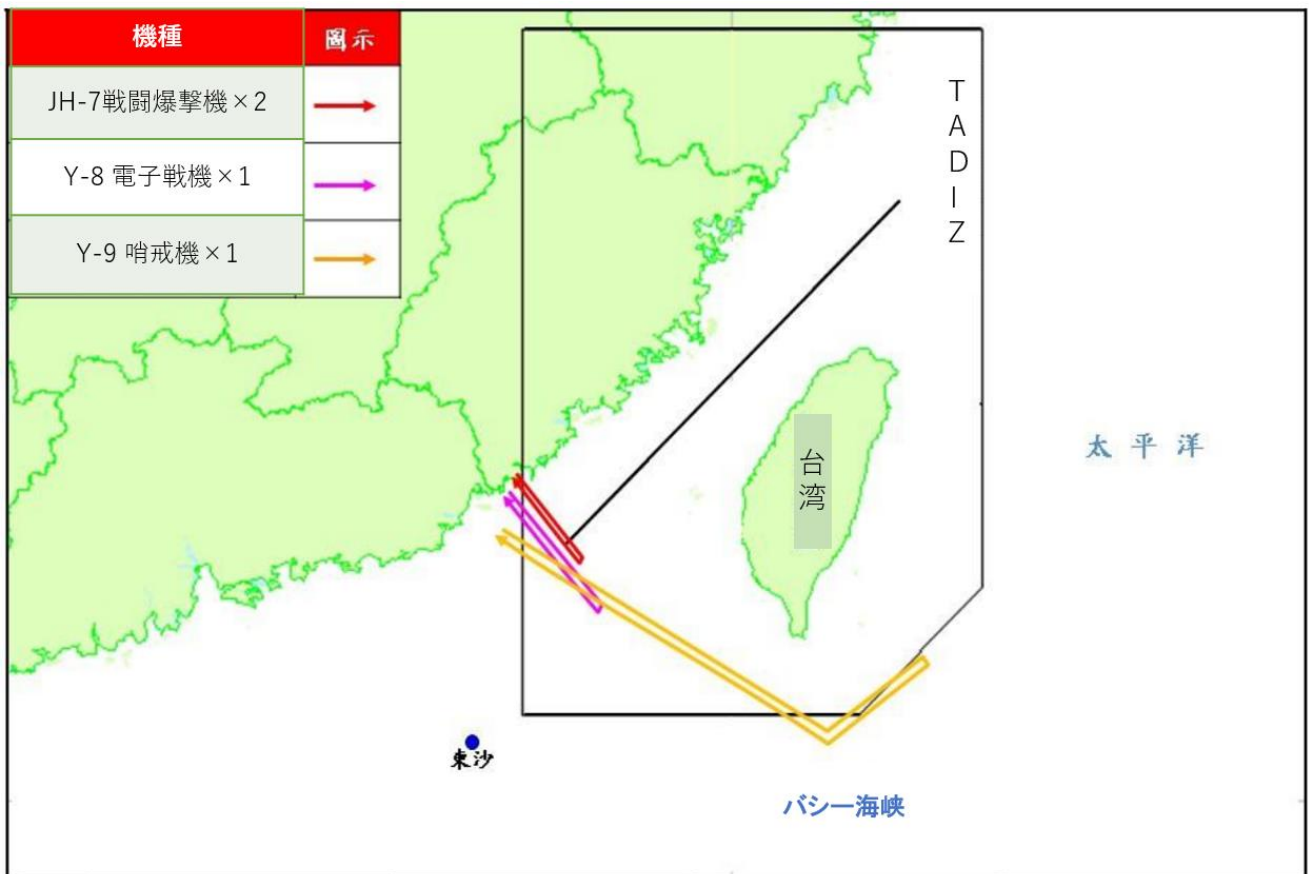
なお、米海軍イージス艦の台湾海峡通過への反応はさまざまである。2020年10月14日、2021年2月4日、24日および3月10日に米海軍イージス艦が台湾海峡を通過した際は、中国軍用機の動きに大きな変化を見せなかった。他方、4月7日のイージス艦の台湾海峡通過前には戦闘機や早期警戒管制機計15機がTADIZ南西空域に進入している¹³。5月18日に米イージス艦が台湾海峡を通過したときは、20日にJH-7戦闘爆撃機2機が台湾海峡中間線の南端の空域を越える飛行を行った（図1）。

¹¹ 「中国軍機20機、台湾の防空識別圏入り 米台に反発か」『日本経済新聞ウェブ版』2021年3月26日。
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM26CKF0W1A320C2000000/>

¹² 「『記録的な数の』中国軍機、台湾の防空識別圏に侵入」*BBC NEWS JAPAN*, 2021年4月13日。
<https://www.bbc.com/japanese/56729013>

¹³ 「米艦船が台湾海峡を通過——演習、挑発を急増させる中国と一触即発に」『NEWS WEEK 日本版』2021年4月9日。
<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2021/04/4adiz.php>

図 1：中国軍用機の飛行状況（2021 年 5 月 20 日）



出所：台湾国防部空軍司令部発表のプレスリリースを筆者修正

これは台湾海峡ではなく、米海軍イージス艦がパラセル諸島で航行の自由作戦を行い、中国の主張する「領海」を航行したことに対する反発と受け取るべきであろう。

2 TADIZ 南西空域進入の目的

中国軍用機が TADIZ 南西空域に狙いを定めて飛行している理由としては、以下のことが考えられる。

(1) 台湾に対する軍事的圧力の強化と台湾軍の対応能力の検証

中国軍は 2016 年、17 年に台湾本島を周回する飛行を繰り返しているが、TADIZ への進入を避けていた¹⁴。しかし、2020 年から中国軍用機の TADIZ 南西空域への訓練飛行・哨戒飛行は連日のように行われている。第 2 期蔡英文政権のスタートと米台関係の緊密化の進展がその背景にあるが、中国側の常態的な TADIZ への進入を行う直接的契機は 9 月 19 日に挙行された李登輝元総統の告別式に米国政府がクラック国務次官を参列させる決定をしたときからである。これに対して台湾空軍は戦闘機を緊急発進させて対応しているが、これは台湾空軍にとって大きな負担となっている。ある程度の回数 of 緊急発進であれば、パイロットにせよ、管制要員にせよ、整備要員にせよ練度の向上に資するが、パイロットの肉体的・精神的負担や燃料消費、整備上の負担の急増もある。

中国軍からすると台湾軍の対応能力を見るという目的もあると推定される。どの時点でどの空軍基地から

¹⁴ 注 3 に同じ。

どの機種が緊急発進を行うのか、現場の空域までの到着に要する時間などを中国軍は分析していると思われる。

台湾空軍の発表データでは中国本土直前の海上で中国軍用機の飛行ルートを意図的に消している。もちろん中国軍用機が空軍基地や海軍航空隊基地を離陸してほどなく、台湾のレーダーは機影を捉えているはずである。しかし、自分のレーダーの探知能力を明らかにするのは得策ではないため、この措置を取っていると考えられる。なお、台湾空軍は緊急発進した際にその時に撮影した中国軍用機の写真も公表していた。航空自衛隊が撮影したものと比較して、台湾空軍司令部が公開した画像はぶれているなど不鮮明なものが多かったが、徐々に技術は向上していた。ところが、ほどなくして空軍司令部は現場で撮影した写真の公表を止め、同型機の参考写真の公表にかえてしまった。写真公開を止めた台湾国防部の意図を推し量ることは難しいが、機体番号やミサイル懸架の有無などを確かめる術が外部の者にはなくなったことは残念である。

(2) TADIZ 南西空域の重要性の上昇

従来は中国軍が台湾を物理的に攻略するとなれば、重要な大都市が連なる台湾海峡に面した西海岸から着上陸するとの見方が大きかった。太平洋側に位置する台湾本島東部は基本的に海岸線まで山が迫る地形が大半で平野部も狭く着上陸作戦には不向きである。しかし、台湾本島北東（太平洋側）に位置する宜蘭平原は中国軍が大規模な着上陸作戦が可能な広さがあるうえに、台北まで約 50 km という距離に位置している。そのため、途中の妨害がなければ機動力を生かして台北まで機械化部隊が 1 時間で殺到するとの見立てがあった。そこで宜蘭平原で 2006 年に第 22 回漢光演習を実施したこともあった。ただし、現実問題として当時の中国軍は戦力投射能力が不足しており、西太平洋上での訓練もできていなかった。しかし、中国海空軍は沖縄島・宮古島間を通過する回数を徐々に増やし、現在は恒常的に同海域を通過するまでになっている。また、艦艇や軍用機で台湾本島を周回する訓練を実施するようにもなっている。このように現在の中国海軍・空軍は、ともに西太平洋上での訓練を頻繁に実施できる態勢を整えているのである。そうすると、沖縄・宮古島間と同様、バシー海峡も艦隊や軍用機が西太平洋に出入りするための有力なルートとなる。自衛隊や米軍の監視態勢が厚い沖縄周辺を回避して西太平洋に出るのに、バシー海峡は好都合なルートでもある。

また、中国空軍が「遠征型空軍」への転換を決定して以後、バシー海峡の重要性が増し、台湾海峡中間線の南端から TADIZ 南西空域の掌握強化を図っていると指摘する台湾研究者もいる¹⁵。バシー海峡近くを対潜哨戒機が頻繁に飛行することで、米海軍や台湾海軍の潜水艦の動きを一定程度牽制する役割も期待できる。また、同空域における飛行を重ねることによって、空域に対する飛行を習熟させることもできる。

さらに TADIZ 南西空域の重要性が高まるにつれて、東沙島の重要性が増してきていることも忘れてはならない¹⁶。仮に中国軍が東沙島を占領して軍事基地化すれば、バシー海峡の西端と台湾海峡の南端を抑え込める状況を作り出せる。東沙島を南シナ海北東海域の拠点とすることで、米軍の南シナ海進入を阻止しやすくなるだけでなく、台湾海峡の通航に際しても心理的な圧迫を加えることが可能となる。

(3) 偶発的な戦闘状態に突入する事態を回避するため

台湾海峡中間線を越える飛行をすると、台湾本島の西側に広がる大都市上空まで戦闘機で数分もかからない。台湾側の緊張感を一気に高めて偶発的な戦闘が開始される危険性を回避するために、これまでのところ

¹⁵ 「共機擾台均在台湾西南方 学者：潜艦戦場経営」『中央通訊社』2020 年 11 月 1 日。

<https://www.cna.com.tw/news/aip/202011010136.aspx>

¹⁶ 門間理良「緊迫化する台湾本島周辺情勢【2】—高まるバシー海峡・東沙島の地政学的重要性—」『NIDS コメンタリー』No.124、2020 年 6 月 16 日。

<http://www.nids.mod.go.jp/publication/commentary/pdf/commentary124.pdf>

台湾海峡中間線の南端以南から TADIZ に進入するよう空域を限定させているのが殆どであった。図は現状では珍しい台湾海峡中間線南端部での海峡中間線越えの事例を示したもので、JH-7 戦闘爆撃機がそれを行っている。

台湾海峡中間線は、1954 年の米華相互防衛条約に基づいた台湾防衛のための計画に示された。以前は台湾空軍と海軍はそれぞれ中間線の位置を決めていたが、2004 年に国防部が統一座標（北緯 27 度、東経 122 度と北緯 23 度、東経 118 度を結ぶ直線上を台湾海峡中間線と規定）を発表したことがある。その後、国防部は座標に関する対外的な説明を行ってこなかったが、2019 年 7 月 30 日に再度座標を発表した。これは 2004 年の座標と同じだった¹⁷。

金門や馬祖への補給のための台湾軍輸送機の飛行を除いて、台湾海峡中間線を越える軍用機の飛行は中台間における長年にわたる暗黙の了解の下で避けられてきた。蔡英文総統は台湾海峡中間線を越えてくる中国軍用機の飛行について、台湾海峡の現状の変更を試みる行為だとして指弾しているが¹⁸、その一方で TADIZ 南西空域への中国軍用機の進入について同様の批判はしていない。台湾側は台湾海峡中間線越え飛行と、単なる TADIZ 進入飛行に差を設けて対処していることが明らかである。

おわりに

中国軍用機がどの基地から飛来しているかは公式資料からは明らかにされない。レーダーの探知能力を知られることは得策ではないため、台湾空軍司令部が中国軍用機の中国大陆に入ってから飛行経路を明かしていないからである。ただし、東部戦区が台湾を担当していることから、軍用機は東部戦区からがほとんどで、一部は南部戦区からも飛来していると考えられる。

軍用機の運用は空軍と海軍航空部隊があるため、戦闘機だからといって空軍所属とは限らない。今後の中国軍は軍種間の垣根を越えた軍用機の運用をより頻繁に行うとともに、東部戦区と南部戦区が戦区を越えた共同訓練を今まで以上に頻繁に実施することで、統合作戦のできる軍隊づくりに向かうことになるだろう。そう考えたとき、東部戦区と南部戦区の境界上に面している TADIZ 南西海空域は中国軍にとって良い訓練の場となっているのである。

¹⁷ 「台湾海峡中間線の座標を改めて公表 15 年ぶり＝国防部」『フォーカス台湾』2019 年 7 月 30 日。
<https://news.livedoor.com/article/detail/16853264/>

¹⁸ 総統府プレスリリース「総統主持『国軍重要高階幹部授勳暨晉任布達授階典礼』」2019 年 4 月 1 日。
<https://www.president.gov.tw/NEWS/24235>

図 2：主な中国軍の航空基地



出所：Office of the Secretary of Defense, *Military and Security Developments Involving the People's Republic of China 2020*, p.103.

注：えんじ色が空軍基地、青色が海軍航空基地

現状で中国軍用機は台湾の領空侵犯は行っていない。その点で中国側の自制は確かにある。しかし、以前の中国軍は TADIZ への進入を避けていたが、いまは普通にそれを繰り返している。また、中国側が相手のある行動をきっかけにして圧力をかけることを常態化させるのは、2012 年 9 月の日本政府による尖閣諸島の「国有化」でも見られた。このような先例からすると、中国軍用機の TADIZ への進入が止まる可能性は低いと考えるべきである。さらに、今後は蘭嶼などの台湾本島周囲の離島に設定された領空や東沙島の領空を侵犯したり、台湾本島最南端の恒春半島の領空をかすめる形での飛行をしたりしては十分に考えられる。

また、TADIZ 南西空域周囲で空中給油の訓練を実施する可能性もあるだろう。それによって飛行距離を稼

いだ爆撃機や戦闘爆撃機がより遠方の米空母部隊を狙うこともできるからである。中国軍にとって重要なことは今世紀半ばまでに「世界一流の軍隊」になることであり、それは米軍と肩を並べる実力をもった軍隊になるということに他ならない。

これらの中国軍用機の連日の台湾 ADIZ 進入をもって直ちに中国軍による台湾進攻作戦が行われるとは言えない。2022 年 2 月に開催予定の北京冬季オリンピックや、同年秋に開催見込みの第 20 回中国共産党大会も控えている。このような政治的に重大な時期を前にして中国が軽々に台湾本島への武力行使に出ると思われぬ。なによりも、米軍の介入より早く台湾を降伏させ占領を完了させる、あるいは米軍の介入を実力で排除できるとの自信がない限り、中国軍による台湾本島への侵攻には慎重にならざるを得ないだろう。

ただし、2023 年以降で、台湾側の守備兵力が手薄で、民間人が居住していない東沙島や馬祖列島の離島などであれば、離島奪取作戦を実行に移し成功させる可能性は十分にあると思われる。台湾が中国の攻撃を抑止するためには、米国との安全保障・軍事上の関係をさらに強化していくことが最も効果的である。それとともに、自助努力としての兵力の充実を目指す姿勢は不可欠である。

(2021 年 6 月 1 日脱稿)

プロフィール

profile

地域研究部長 門間 理良

**専門分野：中国・台湾の政治・軍事、中台関係、
東アジアの国際関係、中国人民解放軍史**

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>